

E-12 世代家族の住み方（その2） 農村の場合

京大工建築 野口美智子

1. 戦後、家族制度の変革に伴い、家族構成は世代家族から核家族へと急速に移行してきている。核家族はそれぞれの世代の独立性を尊重するという意味で大きな特長を有しているが、反面、従来世代家族が果してきた家族成員間の相補的な役割を失ない、老人問題、かぎっ子等が問題となってきている。そこで本研究は親夫婦・子夫婦二世代間の住み方について5つの型を設定し、現状と希望およびその理由を調査した。これは将来における居住方式のあり方を仮設し、チェックしながら、ひいては住宅地計画の一つの指針を発見しようとするものである。

2. 調査対象は高知県下の一農村の主婦33人。調査用紙配布記入法。調査日時昭和43年3月。

3. 住み方の5つの型は、同一世帯型、はなれ型、近隣型、隣り村型、遠隔型である。夫の両親との住み方の現状は、同一世帯型が62%と最も多いが、希望は同一屋敷内で住居、生計費を別にしてはなれ型が38%、同一世帯型が31%である。将来自分の子供との住み方の希望は、長男とははなれ型が42%、同一世帯型が24%であるが、他の子供とは隣り村型が28%、近隣型が24%であり、長男とはより近くに住みたいという傾向がみられる。妻の両親との場合の現状は遠隔型が多く、希望は隣り村型が多い。これらを前回の公営住宅での調査と比較すると、夫の両親との住み方の現状・希望、長男との希望ともに同一世帯型がより多いのは農村の特徴といえよう。